

第十二回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

西村 三郎 著『文明のなかの博物学 西欧と日本』

(1999年8月31日 紀伊國屋書店 刊)

西村 三郎 にしむら さぶろう 昭和5年(1930)生まれ。平成13年(2001年)没。青森県出身。

専攻は地球生物学(とくに海洋生物学)、博物学。京都大学理学部動物学科卒業。水産庁日本海区水産研究所研究員・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所所員など。京都大学総合人間学部名誉教授(受賞時)。著作は、『日本海の成立』、『地球の海と生命』(毎日出版文化賞)、『リンネとその使徒たち』(大佛次郎賞)、他がある。

受賞のことば

このたびは、思いもかけず、和辻哲郎文化賞受賞という栄誉をいただきました。まことに有難いことです。もともと自然科学分野を歩んできて人文系の学問には縁遠かった私が、今回の作品をまとめる過程で、精神史とか倫理といった人間のあり方にかかわる根本的な問題といや応なく向き合わねばならなくなろうとは、予想もしないことでした。私のまずしい励みが、今回の受賞、それもわが国における独創的な人間学の開拓者和辻先生の名を冠する賞によって報われたことは、このうえない名誉であり、喜びもひとしおです。これからも、地球および諸生命と人間とのあり方をめぐって、コツコツと地道に執筆を続けていきたいと願っています。

渡辺 京二 著『逝きし世の面影 日本近代素描Ⅰ』

(1998年9月20日 葦書房 刊)

渡辺 京二 わたなべ きょうじ 昭和5年(1930年)生まれ。京都府出身。

専攻は日本近代思想史。法政大学社会学部卒業。評論家・河合塾福岡校講師(受賞時)。現在は河合文化教育研究所特別研究員。著作は、『小さきものの死』、『評伝宮崎滔天』、『神風連とその時代』、『北一輝』、『日本コミュニズムの系譜』、『日本近世の起源』、他がある。

受賞のことば

思いがけぬことながら、和辻哲郎の名を冠する賞をいただくというのは嬉しくありがたいことです。日本文化史・思想史のなみいる巨匠のうちでも、とくに先生は文学・美術への鋭く豊かな感覚に恵まれ、それが先生の壮大な文明論的考察に、生命感の輝きと繊細高雅な趣きをもたらしていたと思います。そのような先生の学風に、私は若い頃から欣慕の思いを抱いて来た一人です。この度の賞は、もちろん先生のお手より直接授けられるわけではありませんけれども、しっかり勉強せよというお声が、なんだか耳もとに聞えてくるような気が致します。豈奮励せざるべけんやの感を深うする次第です。

《選考委員評》

規模の大きな著作

陳 瞬臣

ユーラシア大陸の東と西で、おなじ近世において、それぞれ独立に類似したひとつの文化ないし社会現象が生起した。一西村三郎氏はこのような文明におけるパラレリズムと称すべき歴史の事実が好奇心を刺激し、この『文明のなかの博物学』という膨大な著作をものされたと述べておられる。私はこの作品がノミネートされる前に、すでに読了していた。私が興味をもったのは、とくに本草学のことだが、あるいは興味をもっている者だけが近づけるのではないかとおそれた。だが、再読してそれが杞憂であることがわかった。この種の著作の

キーポイントは、読者に理解させることを意識した文章にあるとおもう。

すぐれた日本語で書かれた、世界的スケールの比較精神史に脱帽した。なお、図説、写真など本づくりのていねいなことにも感心した。日本の出版物で、インデックスがないがしるにされていることに抗議するかのような丹念な索引は、これからの出版の模範になるだろう。

上巻よりも筆の勢いが乗った下巻のほうがすぐれているという意見もあったが、私は上下両巻にあまり差はなかったように思う。前述したように私は最初、選考者の立場で読んだのではなかったのだから、読みおとしがあったかもしれない。それよりも初読のとき、サブタイトルが「西欧と日本」ではなく、「西欧と東アジア」とすれば、内容がもっとひろがったのではないかという気がした。

それはつぎなる課題かもしれない。私はそれが共同作業になるという夢をえがきながら読んでいたのだ。

東西博物学小年表がついていて、それは一九〇〇年で終わっている。南方熊楠の活躍はそれ以後だが、孫文は日本に来るとき彼のために標本をもって来たものである。こんなエピソードから共同作業の夢にひろがった。たのしませていただいたのだ。

続篇を期待する

渡辺京二氏の『逝きし世の面影』は、貴重な仕事であった。サブタイトルに、「日本近代素描Ⅰ」とあり、Ⅰがあるのだから、ⅡがありⅢがあるだろう。それをはやく読みたい気をおこさせる。

書かれているのは開国前後のことで、時代からいけば四十余年にわたる「明治」期の序章のような感じである。

題にあるように「逝きし世」を、あまり主観的にならずに、訪日した外国人の目に映った豊かな文明の諸相から検討している。なぜ検討するのかといえば、それによって現在がわかると思うからである。

近代日本が滅亡させたものがなにであるか、それがなにを意味するか、私たちはそれを知りたい。私たちの年代は、滅亡の最後の段階を目撃している。たとい幼少であっても、年をとった今、それを自然と拡大して見直すこともできる。そのためのガイド・ブックになるのではないか。

司馬遷が『史記』を書いたのは、春秋戦国などはただのまえがきで、ほんとうは自分が生きて宮刑をうけた漢の武帝の時代、すなわち彼の「現在」を書きたかったのだといわれている。

渡辺京二氏が近代日本を主人公にした、長い長い物語を書こうとしたことを壮としたい。そして「昭和の意味を問うなら、開国以前のこの国の文明のありかたを尋ねなければならぬ」と発言したことも壮としたい。

昭和が終わり、二十世紀も終わろうとしている今、回顧的な文章が多いが、渡辺氏のような時代をきびしくみつめる姿勢がことのほか大切である。

梅原 猛

私は、今度の選考では票が割れるのではないかと思ったが、意外にも二点の作品を残すことに審査員三人の意見がまったく一致した。その二点というのは、一つは西村三郎氏の『文明のなかの博物学 西欧と日本』であり、もう一つは渡辺京二氏の『逝きし世の面影』である。ところが和辻哲郎文化賞の受賞作はふつうは一点なので、この二点のうちどちらを選ぶかに困った。三人の審査員はいずれも、どちらかを当選作としても、他の一点を落とすことを惜しむ気持ちが強かった。それでただ一度だけ二作同時受賞という前例があるので、その前例にならってめでたく二作受賞となった。

渡辺氏の『逝きし世の面影』は、「日本近代素描Ⅰ」という副題があり、これは以後に続く大作の一部ととれるが、以後はどうなるのか、想像もつかない。渡辺氏は、江戸時代あるいは明治時代に日本に来た外国人の目をもって古い日本を再現する。渡辺氏は多少マニアッ

クと思われるほど丹念に外国人の書いた日本旅行記などを読み、そしてそこに現れたかつての日本を再現する。日本の礼儀はどうであったか。あるいは日本の性はどうであったかということ執拗に追いかける。ここには、近代化を善とする日本人が見落とししたさまざまな美德をもっている一つの文明がある。その失われた文明を渡辺氏は何か西洋の奇術師のような手腕で見せてくれる。

この本について注文をつけるならばいくらでもあろう。この外国人の見た日本の像は幻想ではないか。それを幻想でないと主張するには、当時の日本人の見た日本の像と比較対照しなければならないのではないか。そのような注文はいくらでもつくが、私はこの本を一種の奇術師の作品として大いに評価するものである。著者が九州の一角に住み、予備校の教師で生計を立てていることはいっそうこの本の不思議な魅力を強めるものではないか。

西村氏の『文明のなかの博物学』も渡辺氏の著書に劣らず野心的な著作である。西洋と東洋、ギリシアと中国における博物学の発生という問題に端を発し、丹念に文献にあたり、それらの異なった性格を明らかにしつつ近世にいたり、近代西洋と江戸時代の日本の博物学を論じるあたり、まさに圧巻である。この本は東西文明論の性格をもち、果ては現代文明の変更に迫る、甚だ日本人の書物には珍しい雄大な体系的構想をもっている著作である。著者の博識は文理両面に及び、驚くほどである。

ただ惜しむらくは、あまりに微に入り細に入るために、読む者をしてしばしば煩わしい感を与え、通読する根気を失わせる傾向があることである。読み物としてはもっと短くすればよいと思うが、西村氏の学問的良心はそれを許さなかったのであろう。私としては西村氏に、この大著作をもっと短く、もっと読みやすくした著書も書いてほしいと思う。

受賞作二作は異例であるが、今年はこのような二作受賞という異例を採用しなければならないほど力作に恵まれたのである。

中野 孝次

候補作五点を読んで、わたしははじめ渡辺京二「逝きし世の面影」しか推すものはない、と思った。

これは実に稀有な力作で、失われた文明への愛惜にみちた、充実した仕事と言える。

明治初年来日した外国人たち—たとえばハーンやモースやケーベルや—が感服したのは、新時代の、西洋文明を学んだ知識人ではなく、市井の無名の日本人たちだった。そのことは近年しきりにとりあげられているが、渡辺氏の取上げたのはそんな周知の事柄でなく、あたかも来日した外国人すべての声を探りだしたというかのように、博搜これ努めて、実にさまざまな人の感想(わたしには未知のものがほとんどだった)なのである。それらを引き、その意味を探り、彼らの見たものを通じて今は失われた一つの文明(それはたしかに存在した)のかたちを見究めようという、壮大な試みが本書なのである。

「私の意図はただ、ひとつの滅んだ文明の諸相を追体験することにある。外国人のあるいは感激や錯覚で歪んでいるかもしれぬ記録を通じてこそ、古い日本の文明の奇妙な特性がいきいきと浮んで来るのだと私はいいたい。そしてさらに、われわれの近代の意味は、そのような文明の実態とその解体の実相をつかむことなしには、けっして解き明かせないだろうといいたい。」

この意図の前半は、本書の詳細な記述によってほぼ達成されている。明治維新以来百数十年にして、西洋を模した日本近代文明は終末期を迎えたかの観がある。その方法はいろんな分野で機能しなくなり、歪み、すさみが生じている。その中で本書が描き出す江戸末期の日本と日本人の姿は、まるで別世界のように見え、憧憬をさえ生ぜしめる。こういう日本があったのか、と驚くとともに、対比して現在の日本を考え直させる。そういう働きを本書は持っている。それが、近代文明の解体の実体を明らかにするのは、あとに残された課題である。

わたしが「逝きし世の面影」しか推すものはないと考えたとき、わたしは西村三郎「文明のなかの博物学」の上巻しかまだ読んでいなかった。これまたおそるべき徹底性で、中国、日本の本草学と西洋の博物学とをくわしく分析紹介し、その意味と相違を明らかにする。上巻を読んでわたしはただそれだけの研究かと思ひこんだのだった。

ところが下巻を読むに及んでわたしはようやく、この膨大な著書の意図するところを理解した。いままでの博捜が、すべて一つの重い主張を意味あらしめるためであった、とわかり、わたしは評価をあらためた。

著者の主張は後半の「西と東の博物学」以降にいたって、実に熱っぽく展開される。西洋と東洋（中国、日本）の博物学の方法上の根本的な違いに目をとめつつ、今後科学はいかにあるべきかにまで言及する。科学と科学技術があまりに専門家集団の仕事となり、巨大化し、一般人の手の届かぬものになってしまった現在、その科学をもう一度ふつうの人に親しいものにさせるには、博物学への興味を生きかえらせるに如くはない、という。

「そうしたひとつとしてここに提唱したいのが、博物学の再興である。（略）対象をありのままに見て、それを正確に記述するというのも、対象認識のひとつの方法である。むしろ、これが対象認識のもっとも根源的な方法といってよい。」

この主張は、現代科学の人間疎外から科学を救う一つの大きな可能性を示している。そういう文明史的意図を持った力作として、わたしは本書をもぜひ推したいと思うようになったのであった。

ただ、このいたれりつくせりの博物学の紹介の中に、わが国博物学の巨人南方熊楠が欠けているのはいかなるゆえか、わたしには大いなる不満として残ったことを付加しておきたい。